

昔むかし、あるところに、三人の兄弟がいました。三人とも、皇帝のお姫さまを愛していて、妻にしたいと思っていました。おたがいにいいしよにしていました。

ある日のこと、三人は、

「自分たちも結婚する年頃だったので、お金をかせがなくてはいけない」と話し合いました。そして、これからめいめい旅に出てお金をためて、二年たったらまた会おうと決めました。三人は、別の方角へ分かれて出かけて行きました。

二年たちました。

一番上の兄さんは、二年間で百リラかせぎ、ふるさとに向かいました。途中で、市場を通りかかると、ひとりの男が、

「鏡はいらんかね。百リラの鏡だよ」とどなっていました。兄さんは、

「その鏡は、どうしてそんなに高いんだね」とききました。男は、

「少しも高くないさ。この鏡をのぞくと、おまえさんが見たいと思う人をだれでも見ることできるんだから」といいました。

兄さんは、お姫さまのことが急に心に浮かんだので、百リラ出して鏡を買いました。

二番目の兄さんは、二年間で百二十リラかせぎました。ふるさとに向かう途中、市場を通りかかると、ひとりの男が、

「じゅうたんはいらんかね。百二十リラだよ」とどなっていました。二番目の兄さんは、

「そのじゅうたんは、なんだってそんなに高いんだね」とききました。男は、

「少しも高くないさ。このじゅうたんに座るとな、どこへでも好きな所へ、鳥のように飛んでいけるのさ」といいました。

二番目の兄さんは、よるこんで百二十リラ出して、じゅうたんを買いました。

末っ子は、二年間で百リラかせぎました。ふるさとに向かう途中、市場を通りかかると、ひとりの男が、

「シトロンはいらんかね。百リラだよ」とどなっていました。末っ子は、

「たかが果物なのに、なんだってそんなに高いんだ」とききました。男は、

「少しも高くないさ。このシトロンを切って香りをかがせてやると、たとえ死人でもすぐに生き返って元気になるのさ」といいました。

末っ子は、すぐに百リラ出してシトロンを買いました。

やがて三人は、約束の場所で落ち合いました。

一番上の兄さんは、いいました。

「おれは百リラかせいで、この鏡を一枚買ったんだ。おれが見たいと思う人をだれでも見る事ができる鏡なんだ。おまえたちは、いくらかせいだんだ」

二番目の兄さんは、

「おれは百二十リラかせいで、このじゅうたんを買ったんだ。どこでも好きな所へつれていってくれるじゅうたんさ」といいました。末っ子は、

「ぼくは百リラかせいでこのシトロンを買ったんだ。これを切って香りをかがせると、死んだ人でも生き返るのさ」といいました。そして、一番上の兄さんに、

「ねえ、ぼくたちに、その鏡をのぞかせてよ。愛する人のすがたを見せてほしいんだ」とたのみました。

三人は、いちどきに、鏡をのぞきこみました。すると、皇帝のお姫さまが、ひつぎの中に横たわっているのが見えました。三人は、びっくりぎょうてんしていいました。

「おまえたちもお姫さまを愛していたのか。でも、たいへんだ。お姫さまは死んでしまったぞ。さあ、じゅうたんに乗ってお姫さまのもとへ飛んでいこう」

三人がじゅうたんにとび乗ると、あつという間に宮殿に着きました。お姫さまは本当に、死んでひつぎに横たわっていました。皇帝や宮殿の人びとは嘆き悲しんでいました。皇帝は、「姫を生き返らせることができる者があれば、姫と結婚させる」というおふれを出していました。末っ子は、

「ぼくがお姫さまを生き返らせてみせます」といって、シトロンを取り出し、半分に切って、お姫さまの鼻の所に持っていききました。シトロンの香りが広がるやいなや、お姫さまは、ぱっちり目を開けました。皇帝は大喜びして、末っ子と結婚させようといいました。

すると、一番上の兄さんが、

「わたしがこの鏡を持っていなければ、お姫さまがなくなっただのが分からなかったんです。だから、お姫さまを助けたのはこのわたしです」といいました。二番目の兄さんも、

「わたしがこのじゅうたんを持っていなければ、お姫さまのもとに来ることができなかつたんです。だから、お姫さまを助けたのはこのわたしです」といいはりました。末っ子は、

「わたしがシトロンを持っていなければ、お姫さまを生き返らせることができなかつたんですよ」といいました。

皇帝は困りました。だれをお姫さまの夫にすればよいでしょう。お姫さまを三つに分けるわけにも行きません。そこで、裁判官に相談しました。

裁判官は、一番上の兄さんにききました。

「おまえはその鏡をいくらで手に入れたんだね」

兄さんは、「百リラです」と答えました。すると、裁判官は、兄さんに百リラわたして、

「この百リラを取りなさい。これでおまえには損はないわけだ」といいました。

つぎに裁判官は、二番目の兄さんにききました。

「おまえはじゅうたんをいくらで手に入れたんだね」

「百二十リラです」

裁判官は、兄さんに百二十リラわたしました。

「この百二十リラを取りなさい。おまえもこれで損はないはずだ」

最後に、裁判官は末っ子にいいました。

「おまえのシトロンは切られてしまつて、もう二度と役には立たない。だから、おまえがお姫さまを妻にするとよい」

こうして、末っ子はお姫さまと結婚して、いつまでも幸せに暮らしましたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話 8 中近東』鈴木満訳／ぎょうせい